保育者の「絵本の読み聞かせ」意識
―１歳児クラス担任に対するフォーカス・グループ・インタヴューから―

内　藤　綾　子

Ayako NAITO：The Nursery School Teatchers' Consideration about Picture Book Reading
―Interview to classroom Teachers for One-Year-old children―

鳥取短期大学研究紀要　第62号　抜刷

２０１０年12月

保育者の「絵本の読み聞かせ」意識
―1歳児クラス担任に対するフォーカス・グループ・インタヴューから―

内　藤　綾　子

Ayako NAITO：The Nursery School Teatchers' Consideration about Picture Book Reading
―Interview to classroom Teachers for One-Year-old children―

1歳児クラスにおける「絵本の読み聞かせ」の意義を担当保育者がどのように考えているのかを明らかにすることを目的として，保育者4人に対してフォーカス・グループ・インタヴューを実施した．インタヴューを通して，①1歳児クラスに在籍する子どもたちは，必ずしも絵本や保育者のテーマに沿って絵本を読んでいるわけではなく，身近な物と絵本のなかの物とを関係づけながら楽しんでいること，②保育においては1歳児のペースを尊重しながらも，その時々の保育の意図に応じた読み聞かせ形態がとられていることが示唆された．

キーワード：絵本の読み聞かせ　1歳児　発達　保育実践

1．問題と目的

保育現場において，乳幼児に対する絵本の読み聞かせは，日常的におこなわれている．

徳永（2009）は，自身の読み聞かせ実践記録をまとめ発表している[1]．そこでは，絵本を読んでもらうことで子どもはおとなのぬくもりを感じているとして，0歳児の好む絵本の特徴を列挙し，子どもの発達にそった読み聞かせの実践を提唱している．

発達心理学的観点からも数多くの研究がなされている（たとえば田代，2007）[2]．沢田ら（1974）は，幼稚園年長児を対象に読み聞かせをおこない，子どもの反応に基づいて絵本のおもしろさを分析した[3]．その結果，おもしろい絵本に対しては読み聞かせ中の集中度が高いこと，また物語内容においては，①生活環境や生活経験の一致がおもしろさに影響すること，②話のパターンや言葉のくり返しがあると子ども内部に期待が生じ興味を増加させることなどが示唆されている．横山（2003）は，シリーズ絵本の読み聞かせに着目した上で，5歳児クラスでの担任保育者による読み聞かせを記録し，さらに保育者に面談をおこなった[4]．その結果，初回から子どもの発話数が多く，イニシアティブは子どもが握ることが多く積極的な参加がみられたこと，発話内容については自己と対比した発話が多かったことなどを明らかにしている．

また徳渕ら（1996）は，集団での絵本の読み聞かせ場面における子どもたちの相互作用について調査し，その発話内容を分析した[5]．3歳児群の発話は散発的であり他児の発話に影響することはあまりないが，4歳児群になると他児の発話に誘発される発話が増加してくること，さらに5歳児群では，他児の発話を繰り返すばかりでなく新たな内容を付け加えることが急激に増えてくることが指摘されている．

以上のように，3歳以上の子どもたちを対象とした絵本の読み聞かせ研究は多くみられるが，実践記録を除くと，保育場面における3歳未満の子どもたちを対象とした研究はわずかである．

3歳未満の子どもたちを対象にした研究は，たとえば，2000年の「子ども読書年」を契機に始まった「ブックスタート」の活動（NPO ブックスタート，

2010；2010年8月27日付朝日新聞)[6]を，乳児健診場面で体験した保護者対象の事後調査や（田丸，2007)[7]，絵本場面と積木場面とで母子の共同注意の指さしのちがいに注目した研究がみられる（菅井ら，2010)[8]．また，古屋ら（2000）は，１歳代約１年間を通して子どもが絵本の登場人物の情動をどのように理解していくのか，その発達的変化を検討している[9]．そこでは，子どもたちは１歳前半から何らかの形で物語に関する「確認・命名」をし，個人差はあるが１歳半ばころから物語の内容に言及し始めること，１歳後半には登場人物２人のやりとりをおもしろがるような笑顔がみられることなどを明らかにしている．しかしながらこれらはいずれも保護者あるいは母子を対象としているものである．

寺田（2000）は，３歳未満児を対象とした集団の場面分析研究が見当たらないが，会話構造が柔軟になり，絵本への集中時間が延びてくる３歳前後期の研究は興味深いことを指摘した上で，２歳児の絵本の読み聞かせ場面を録画しその分析を通して，２歳児が読み聞かせに集中するための保育方略を明らかにしている[10]．寺田によれば，２歳児においては子どもの集中には場面への導入が有効であること，環境構成が読み聞かせに影響すること，生活リズムが最優先されること，などが示されている．

なお，通常絵本の読み聞かせはおとなが子どもに向かって絵本を開き読み進めるという形態をとる．そこには当然，読み手の意図が反映される．こうした，読み聞かせを構成する保育者の思考と行動に焦点をあてた研究もみられる．たとえば秋田ら（1998）は，幼稚園教諭を対象に個別面接をおこない，保育経験が長くなるとより長いスパンで子どもの育ちを見通し，子どもの自発性を重視した読み聞かせが行われるようになること，また経験によって，読み聞かせの場面で生じる問題への具体的な対応策を複数習得していくことなどを明らかにしている[11]．

こうした未満児を対象とした保育場面の観察研究は，発達的観点からみても，保育的観点からみても，さらに積み上げていく必要があろう．

そこで本研究では，絵本の世界に入っていく前段階と考えられる，１歳児クラスでの集団での絵本の読み聞かせ場面に注目することとする．今後，観察研究に取りかかるにあたり，担任保育者が，「絵本の読み聞かせ」をどのように構成しようとしているのかその意識を明らかにすることで，観察の視点が絞られてくると考えるからである．調査にあたっては，複数担任制をとる保育者たちの保育方針を明らかにするのに適していると思われる，フォーカス・グループ・インタヴュー[12]を用いる．自由な雰囲気のもと，少人数の参加者によって，あるテーマを深め議論することが可能なためである．これらを通して，１歳児の絵本読みに関する発達的特徴と，それを支える保育方略について検討したい．

２．方法

⑴ 調査協力者

Ａ県内Ｂ保育園の１歳児クラス担任保育者４人（保育経験１～15年）．Ｂ保育園は，「育児担当制」の保育を実施し，家庭的雰囲気を大切にしている園であり，日常的に絵本を保育活動のなかに取り込んでいる．保育者は，いずれも2010年４月から該当クラスを担任している保育士であり，クラス内での４人の連携もとれている．また，これ以前の未満児クラス担任経験は，３人が「あり」，１人が「なし」であった．なお，筆者は2010年８月より，該当クラスに週１回程度観察に通っており，担任保育者らとの面識がある．

⑵ 実施日時

2010年９月10日　14：20～15：10

⑶ 場所

Ｂ保育園内の１歳児保育室

⑷ 手続き

フォーカス・グループ・インタヴューを実施した．

最初に調査者より，インタヴューの目的が，「１歳児クラスにおける絵本の読み聞かせの意義を担当保育者がどのように考えているのかを明らかにする」ことであると説明した．その後，子どもに読み聞かせをする上で意識していることは何か，協力者に自由に議論してもらった．インタヴュー過程は調査者が筆記記録するとともに，IC レコーダーに音声を録音し，それらを文字化したものを分析資料とした．

⑸ 分析

絵本の読み聞かせをおこなうにあたり，①保育者として働きかけてきたこと，②働きかけを通しての気づきや発見，の２つの観点から分析をおこなった．表１にその全体像を示す．①については，「読み聞かせ環境」「絵本の選定」「子どもに好まれる本とそうでない本」「絵本の展開」「読み聞かせで大切にしていること」の５つの下位カテゴリーが，②については「保育者自身の振り返り」「子どもの反応の振

表１　カテゴリー一覧

	カテゴリー	下位カテゴリー
保育者として働きかけてきたこと	読み聞かせ環境	読み聞かせ頻度
		冊数
		時間帯
		読み聞かせ担当
		読み聞かせの導入
		クラス内の本棚の状況
	絵本の選定	子ども側から出てくるもの（直接）
		子ども側から出てくるもの（間接）
		保育者が意図的におこなうもの（遊びとつなげる）
		保育者が意図的におこなうもの（生活場面とつなげる）
	子どもに好まれる本とそうでない本	好まれる（自然に子どもが集まる内容）
		好まれない（くいつきが悪く子どもがまばらになる内容）
	絵本の展開（読み聞かせ場面からの広がり）	運動会や発表会への展開
		日常保育への展開
		家庭への展開
	読み聞かせで大切にしていること	内容を子どもたちに伝えていくこと
		子どもとのやりとり
		遊びに絵本がつながるようにすること
		絵をみせる（子どもは絵を読む）
働きかけを通しての気づきや発見	保育者自身の振り返り	先輩の保育士と話し合う大切さ
		自分とはちがう読み方の発見（抑揚のちがいなど）
		自分の幼いころと目の前の子どもたちを重ね合わせてとらえる
		月日の流れを感じたこと（いろんな本を読んできたこと）
		日々自分のなかで評価と反省をする
	子どもの反応の振り返り	０歳児クラスから１歳児クラスへの変化(一対一からまとまりへ)
		遊び方の変化（一人から友だち，みんなへ）
		絵本と体験の結びつき
		子どもなりの読み方
		絵本実践のスタート（絵本を使って「返事」をしよう）

り返り」の２つの下位カテゴリーが見いだされた．

３．結果と考察

⑴　保育者として働きかけてきたこと

１）クラスの読み聞かせ環境

クラスでの読み聞かせ頻度はどのくらいか尋ねたところ，「毎日読んでいる」とのことであった．また，冊数は３冊から５冊，よく読み聞かせをおこなう時間帯は「朝・おやつの前・午睡前・夕方」の４つであった．特に朝の時間帯は保育者が少なく保育が手薄になりがちなため，読み聞かせの活動が選ばれていた．読み聞かせを担当する保育士は厳密に決まっているわけではなく，日々役割を交替し，また時間帯やその時々の状況をみながら，子どもの近くにいる保育者が臨機応変に読み聞かせていた．また，読み聞かせ場面への導入は，保育者がイニシアティヴをとって「はじまるよ」の歌を歌ったり，アンパンマンの手遊びをしたりする場合と，保育者が本を開くと子どもたちが集まってきたり椅子に座りだしたりして自然発生的に読み聞かせが始まる場合とがある．

なお，クラス内には２つの本棚がある．１つは保育園の全クラス共通の本棚で，貸し出し図書がおさめられているもの．これは，基本的には保育者が出し入れをするもので，棚も大人の背の高さに設置されている．もう１つは，１歳児クラスの本棚で，「こどものとも０・１・２」シリーズがおさめられているもの．本を直接布ポケットに入れる形状になっており，子どもも出し入れしやすい高さに設置されている．

２）絵本の選定

どの絵本を読み聞かせるか決める際，主に３つのやり方があった．１つめは，子どもから直接「よんで」とリクエストされた本を読むこと．２つめは，子どもがしている遊びを保育者が観察し，絵本のテーマとして取り上げること．「子どものあそんでいる様子をみて，乗り物みたいなので遊びをしてたらそういう絵本を探して読んだりとか．」「それがまた遊びにつながっていく」という発言があった．３つめは，保育者が意図的にあるテーマを取り上げることである．これはさらに次の２つのケースにわかれており，①「たとえば水遊びがはじまるけえ，水遊びの本を読んで，遊びに行くっていうこともあるだろうし，ブドウ（天井につるしてあるブドウの制作物）作った時はブドウの本を見せて」というように，遊びへの導入として用いられる場合と，②「おやつの前なら『いただきます』を読んで，じゃあおやつ食べに行こうかとか，寝る前は『ねないこだれだ』とか，寝るような本を読んで，みんなも寝ようかー」というように，次の生活場面への導入として用いられる場合，とがあった．

３）子どもに好まれる絵本とそうでない本

１歳児クラスの子どもたちに好まれる絵本について質問したところ，以下のような具体的な絵本の名前が挙がった（表２）．

表２　挙がった絵本

タイトル	作　　者	出版年	出版社
ねないこだれだ	せなけいこ	1969	福音館書店
あーんあん	せなけいこ	1972	福音館書店
いいおへんじできるかな	木村　裕一	1992	偕成社
もこ もこもこ	作：谷川　俊太郎， 絵：元永　定正	1977	文研出版
いないいないばあ	作：松谷　みよ子， 絵：瀬川　康男	1967	童心社

『ねないこだれだ』を筆頭に，『あーんあん』などのせなけいこの絵本シリーズは子どもに人気があるという．特に，『ねないこだれだ』はほぼ毎日読んでおり，子どもたちも「おばけー，おばけー」と言ったり，絵本のなかの「ボンボンボン」という時計の音などを覚えていて，真似しているという．また，『もこ もこもこ』も，「もこもこ」と保育者が言えば，「もこもこ」と繰り返すなど，みんなで言う姿がみられる．

反対に，子どもに好まれない絵本，「くいつきがよくない」絵本はどのようなものか尋ねたところ，①繰り返しがない絵本，②ストーリーが長い絵本，③時代にそぐわないことばづかいの絵本などが挙がった．好まれない絵本でも，②については「２歳児になったらいいかも」と保育者が発言しているように，１歳児という年齢に照らし合わせたところ集中が続かないが，発達とともにおもしろさを感じるようになるのではないかと考えられているものもあった．

なお，好まれる絵本と好まれない絵本を読んだときの子どもの反応のちがいは顕著である．好まれる場合，いつの間にかほぼ全員が集まっているのに対し，好まれない場合は，集まっていた子どもたちがその場からいなくなる，保育者のことばを借りれば「散っていく」のでわかりやすいのだという．

４）絵本の展開―読み聞かせ場面から他の場面への広がり―

絵本の読み聞かせ活動は，その時間だけにとどまらず，他の活動や時間帯にも広がっていく．その展開のしかたは，主に３つある．

１つめは，運動会や発表会などの，園の大きな行事への展開である．絵本をきっかけにして保育で使い始めた歌を，１歳児クラスの登場曲にしようといったものである．２つめは，日常保育への展開である．絵本で楽しんだ場面や子どもになじみのある場面を，積木や箱といった保育の遊びのなかで生かすものである．最後は，家庭への展開である．絵本のフレーズは，家庭での親子の会話のなかにも登場し，保護者からも「なんのことでしょうか？絵本でしょうか？」と連絡帳にコメントが寄せられるそうである．次の発言にあるように，実際にはこの３つは相互に関連している．「『のせてのせて』って本があるんだけど，それを読んどったら，家からのおたよりに，“トンネルを通ったら，『とんねるとんねるまっくらまっくら』って言うんですけど”っていうのが書いてあって，何気なく読んどるんだけど，ああちゃんと，そうやって子どもが思って読んどるんだなって，みとるんだなって思って，そこから遊びが広がって，段ボールの箱に入ったりとか，積木にまたがって…（中略）…そっからそういう感じの手遊びとかね，遊びを拾ってきて，今，“バスに乗ってゆられてる♪”っていうのもして，今そこがすごい遊びが盛り上がってる」「運動会もちょっと親子で」「使って，その曲にあわせて登場できるかな」というように，保育者は最初のきっかけを逃さず，さらに実践に返していくというプロセスがうかがえる．

５）読み聞かせで大切にしていること

このテーマについては，保育者ごとの観点があがった．以下それぞれ挙げていく．①本の内容が伝わるように読むこと，あるいは何をことばで伝えていくかということ．②絵本が遊びにつながるようにすること（絵本から遊びを拾う）．③子どもは絵を読むので，絵がしっかり見えるようにし，その絵のなかでいろいろなことを感じられるようにすること．④ストーリーを追うというより，その子どもとのやりとりを大切にする，子どもが言ったことばを拾いながら，話を進めていくこと．

⑵　働きかけを通しての気づきや発見

１）保育者自身の振り返り

フォーカス・グループ・インタヴューを進めていくなかで，保育者が自身の実践を振り返る発言がみられた．

ある保育者は，先輩保育士と絵本について語り合う重要性を感じたと述べ，「その絵本を通して，一

つでも，子どもがいろんな面で育っていったりとか，自分がやっていかないけんこととかも，もっとあるんだなーって，感じました」というように，最後は自分の保育にひきつけて振り返っている．またある保育者は，「みんなが一冊の本を交替で読むと，人によってなんか，読み方の抑揚とかがちがうのがおもしろいんで，参考に」すると述べていた．複数で担当するなかで，お互いの存在が刺激を与えあっていることがわかる．また，ロングセラー絵本は保育者の幼いころの体験と今を結びつける．「やっぱりなんか，昔からねえ，ロングセラーの本ってほんとに，子どもの心をとらえとるんだなっていうのを，（略）今年は，『のせてのせて』の本も，何気なく出して読んだんだけど，そこの『とんねるとんねるまっくら』の台詞が，『ああ，自分がちっちゃいときにそうやって言っとったー』って今年気づいて」，また新たな発見をしたという．また，「半年でけっこう，いろんな本を読んできたんだな」という発言にもみられるように，自らの保育実践を振り返る様子もあった．「日々自分のなかで評価と反省をする」という発言もあった．

2）子どもの反応の振り返り

保育者は日々子どもの反応をとらえ，臨機応変に対応しているが，改めて思い起こしてみると，子どもの反応の大きな変化や特徴がみえてくるようである．以下にそれぞれの発言を挙げていく．

① 0歳児クラスから1歳児クラスへの変化

0歳児のときは保育者も担当制であり，絵本も一対一での読みが多く，みんなで集まる機会もそれほど頻繁ではなかったが，今は集団で読み聞かせができる．

② 遊び方の変化

遊び方もだんだん変化している．自分ひとりで箱の中に入って遊んでいたのが，友だちが乗っている箱を押しだしたり，みんなで並べて「かいもん（買い物）」と言いだしたりするなど，一人から友だちへ，そして集団へと関係が変化している．

③ 絵本と体験の結びつき

体験と絵本とが結びつくことで，より絵本の楽しみが深まるという．みんなで車で出かけたとき，「かいもん（買い物）」と言ったり，買ってきたふりをしてみんなに「どうぞ」と言ったりと，広がりがみられる．

④ 子どもなりの読み方

絵本の楽しみ方は人それぞれだが，時に大人である保育者と子どもたちとの食い違いが起こることもある．保育者たちは思わずその場面を思い出して笑いながら，エピソードを語っていた．たとえば，『いやだいやだ』の絵本や『あーんあん』の絵本を出してきたとき，「○○ちゃん！（よく泣くクラスの友だちの名前）」と子どもが発し，その観察眼に驚いたこと．「かめ！かめ！」と何度も絵本をリクエストするので，カメがテーマの絵本を差し出すと，「ちがう，ちがう」．よくよく聞いてみると，小さくカメが出てくる『かばくん』の絵本のことであった，といったものである．

⑤ 絵本実践のスタート

該当クラスでの絵本実践のスタートも，やはり子どもの姿から出発していた．これも，インタヴューを進めるなかで，保育者から振り返りがあったものである．「（4月当初）泣きとかが落ち着いてきたころに，これ（絵本『いいおへんじできるかな』のこと）を読んでみんなに名前読んで返事をしたのが最初かな…（略）じゃあみんなの名前も呼ぶけ，返事してよーって言って，一人ずつ呼んで返事をするところから始めたら，けっこうみんなが本が好きだっていうのがわかって」，このクラスでの絵本の読み聞かせスタイルが形成されてきたようである．

4．まとめ

フォーカス・グループ・インタヴューを通して，インタヴュー開始直後には，保育者が「自然と（絵

本の読み聞かせに）集まる」と言っていた，その中身が明らかになった．絵本環境を整えるだけではなく，日々子どもの反応をもとに保育を組み立てている保育者の存在や，子どもたちの発達的変化が，絵本の読み聞かせを親しみあるものにし，またダイナミックなものにしているのである．ここでは，①2歳前後の子どもたちの絵本の楽しみ方，②保育者が保育実践を創りあげていくプロセス，という発達的な問題と保育上の問題の2点について考察する．

⑴　2歳前後の子どもたちの絵本の楽しみ方

今回取り上げた1歳児クラスの子どもたちは，生活年齢でいえば，2歳前後の子どもたちのクラス集団ということになる．では，2歳前後の子どもたちはどのように絵本の読み聞かせを楽しんでいるのであろうか．

神田（2004）は，1歳児と2歳児の絵本の見方について，次のように述べている[13]．

1歳児は，見開き2ページに大きくひとつのものが描かれている絵本が大好きであり，それは，表象が成立してきた1歳児にとって，描かれている絵と，自分の表象とを照合させて，「知ってる」と思い当たる喜びからくるものであるという．一方2歳児は，見開き2ページにたくさんの同じようなものが細かに書き込まれているものが好きになるという．それは，ひとつに関心を向けただけで頭がいっぱいになるのではなく，それを心に残しつつ次のものに関心を向けるという，「心の中の容量」の広がりであり，本物と別の物とを関係づけたり，「大きい，小さい」といった関係を表す概念に気づいてくのである．

1歳児クラスに在籍する子どもたちは，この表象から概念へと，新しい力を獲得していく時期にあたると考えられる．

結果⑵④の『かばくん』の絵本のエピソードをみてみよう．

『かばくん』の絵本は，動物園のかばくんの一日が描かれたものとして紹介されることが多いが，中表紙を含め14場面中11場面に小さなカメの子が登場する．子どもたちは，この本を読んでほしいとき『かめ！かめ！』と何度も言ったという．インタヴューで保育士が，「うちやあは『かばくん』の本を読んどるんだけど子どもにとっては『カメ』」と述べているように，テーマとなっているカバよりも脇役のカメに意識が向いていることに注目したい．これは，大人と子どもの読み方のちがいともとれるが，2歳前後の子どもたちらしい読み方ともいえる．

実は，クラス内にはカメが飼育されており，子どもたちは親しみを持っているようである．何気なく読んだ本にカメが登場するやいなや，「あそこにもいる」とばかりに「あーあーあーあー」と反応する．神田の言うように，絵本のなかのカメと，クラス内の本物のカメを関係づけ，楽しんでいるのではないだろうか．単に「知ってる」という感動にとどまるのではなく，何度も何度も登場するカメを心に残しているからこそ，「かめ（の絵本）」として認識されているのではないか．

保育士はまた，こどものとも0・1・2の置かれている1歳児クラスの棚の絵本は，「簡単な絵本なんです（略）ちょっと物足りなくなってきているところもあって」と述べている．一方で，「ストーリーが長い絵本はくいつきが悪い」との発言がある．

絵本の楽しみ方は子どもの好みや保育環境により異なるが，年齢ごとに何を喜ぶか，何を楽しいと感じるかが大きく異なる可能性が示唆される．未満児クラスを対象とした，より詳細な調査が必要である．

⑵　保育実践を創りあげていくプロセス

寺田（2000）は，2歳児クラスでの読み聞かせ場面では，集中時と非集中時とが2段階になって構成されており，その入れ替わり頻度は3歳以上児への読み聞かせ場面に比べて高く，些細なことから非集中時になりやすいことを指摘している．そのため保育者は，子どもを見つめたり，ジェスチャーで対応するなどして，瞬間瞬間に子どもの心理状態を把握しながら保育方略をとっているという．またその読み聞かせを構成する前段階には，子どもの視界に絵

本以外の物が入り難い場所に設定する，所持品を預かっておくなど，読み聞かせの導入もおこなわれている．

仮にこうした寺田の実践形態を「積極的読み聞かせ」とするならば，今回調査した１歳児クラスにおいては，「自然発生的読み聞かせ」が多く取り入れられているといえる．たとえば子どもに「よんで」と言われたとき，保育者は自然にその本を開いて読み聞かせをする．それを見た他の子どもたちも集まり，いつの間にか数人の集団になっているというものである．これは，自分のペースを持っている１歳児クラスという年齢も関係すると思われる．しかし，４月当初からの保育の積み重ねにより，子どもの方が「絵本をみるときは隅のスペースに座る」，「お話の前に歌がある」などのリズムをよく理解して，行動しているともいえる．

また，その時々の保育の意図によって，寺田の示す「積極的読み聞かせ」が用いられるときもある．たとえば，「ぶどうの制作物を作る」という保育を設定するとき，子どもたちが次の活動への見通しを持ち，イメージが膨らむように絵本を読み聞かせをおこなっている．つまり，実際には保育者たちは，その時々の保育形態に合わせて，絵本を選定したり，導入の有無を考えたりしているのである．

こうした保育上の工夫や，寺田の言う保育方略についても，さらなる検討が必要である．

⑶ 今後の課題

本稿は，１歳児クラスの絵本の読み聞かせの意義について，保育者に対するフォーカス・グループ・インタヴューをもとに検討したものである．調査を通して，２歳前後の子どもたちに特徴的な絵本読みのあり方や，子どものペースを尊重しつつ保育を展開する保育上の工夫などが明らかになった．

特に，フォーカス・グループ・インタヴューを用いたことで，お互いの発言を踏まえつつ，共感したり，別の視点が提出されたり，時には同時に発言したりと，複数の保育者が一つのクラスを担当し，お互いの観点を持ちながらも協同して保育を練り上げていくプロセスを垣間見たようであった．

今後の課題として，１歳から２歳にかけて，絵本読みの質がどのように変化するのか，子どもたちへの観察を通してより具体的に明らかにすることや，その変化を保育士がどう気づき，自らの保育に取りこんでいくのか，明らかにする必要がある．

注・参考文献

１）徳永満理　2009　赤ちゃんにどんな絵本を読もうかな―乳児保育の中の絵本の役割―　かもがわ出版

２）田代康子　2008　絵本の発達心理学研究の最近三年間の動向　絵本ブックエンド 2008

３）沢田瑞也，田代康子，小林幸子，高木和子　1974　絵本のおもしろさの分析―内容の分析と読みきかせ中の反応を中心として―　読書科学 17 (3.4) p. 81-93

４）横山真貴子　2003　保育における集団に対するシリーズ絵本の読み聞かせ―５歳児クラスでの『ねずみくんの絵本』の読み聞かせの事例からの分析―　奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 12，21-30

５）徳渕美紀，高橋登　1996　集団での絵本の読み聞かせ場面における子ども達の相互作用について　読書科学読書科学 40(2)，41-50

６）2010 年 8 月 27 日付朝日新聞記事「赤ちゃんに絵本を―『ブックスタート』日本で発足 10 年」

７）田丸尚美　2007　乳児健診での絵本体験にみる親子の関わり　臨床発達心理学実践研究　第２巻 p. 117-122

８）菅井洋子，秋田喜代美，横山真貴子，野澤祥子　2010　乳児期の絵本場面における母子の共同注意の指さしをめぐる発達的変化：積木場面との比較による縦断研究　発達心理学研究 21(1)，46-57

９）古屋喜美代，高野久美子，伊藤良子，市川奈緒子　2000　絵本読み場面における１歳児の情動の表出と理解　発達心理学研究 11(1)，23-33

10）寺田清美　2000　2歳児の絵本の読み聞かせ場面における保育者の思考と行動　日本保育学会大会研究論文集(53)，304-305

11）秋田喜代美，横山真貴子，寺田清美，安見克夫，遠藤雅子　1998　読み聞かせを構成する保育者の思考と行動(3)：読み聞かせはどのように熟達化するのか？：経験年数による比較　日本保育学会大会研究論文集(51)，546-547

12）Beck, Trombetta と Share（1986）は，フォーカス・グループ・インタヴューについて次のように記述している．「フォーカス・グループ・インタヴューとは，具体的な状況に即したある特定のトピックについて選ばれた複数の個人によって行われる形式ばらない議論のこと」である．（S・ヴォーンら 1999「グループインタビューの技法」慶応義塾大学出版会に詳しい）．

13）神田英雄　2004　伝わる心がめばえるころ―2歳児の世界―　かもがわ出版

付記

調査にあたっては，鳥取みどり園の山本恵子先生をはじめ，下根朋美先生，園田紗希先生，西村美咲先生，加藤麻衣先生，さらには園の先生方にご尽力いただきました．また，福山市立女子短期大学の田丸尚美先生にもご助言いただきました．記して感謝いたします．